

横浜市立 南台小学校 学校評価報告書 (令和 4 年度)

重点取組分野	令和 4 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	① 朝モジュールや宿題の計画的な実施により、基礎・基本の定着を図る。 ② 主体的に問題解決に取り組み、自分の考えを言葉でわかりやすく伝え合う力を育てるために、国語科重点研究を中心に、授業改善を図る。 ③ タブレット端末の活用の仕方を工夫し、各教科での授業改善を図る。	① 朝モジュールや宿題の計画的な実施を行い、基礎・基本が定着するよう努めた。 ② 国語科重点研究を中心として、主体的に問題解決に取り組み、語彙を増やす取組等を行うことで自分の考えをわかりやすく伝え合う力を育てるよう授業改善を行った。 ③ 学年や各教科に応じてタブレット端末の活用できるよう授業改善を図った。	B
人権教育	① 学校生活全般を通して、一人一人のよさを認め大切にすることで、自己肯定感を高めていく。また、学習室の計画的な活用など、授業づくりの面からもユニバーサルデザインの視点を取り入れ、だれもが安心して豊かに楽しく生活できる学校をめざす。 ② 学校行事を通して、主体性を引き出し、協働することのすばらしさを実感させ、他者を思いやる心を育てる。	① 学習室の計画的な活用が難しかったため、支援を要する児童が安心して学習に取り組めたかは懸念が残る。 ② 様々な学校行事を通して、主体的にまた協働することの素晴らしさを実感させることができた。	B
健康教育	① 感染症対策を講じながら、体育科学習、休み時間、ペア活動を利用した運動の充実を図り、心身の健康の保持増進を目指す。 ② 基本的な生活習慣の定着を目指すとともに、病気やけがの予防、食に関心をもたせ、感染症対策に向けた環境改善や指導を継続的に進める。	① ルールの工夫や集合する時のマスクの着用など、対策を講じながら、体育科学習を行った。運動月間では、ペアクラスでの長縄に取り組み、運動に親しむことができた。 ② 委員会活動を中心に手洗いの奨励、校内でのけが防止に努める活動を行った。また、食育タイムや給食クイズなどを行い、食への関心を高めた。	B
地域学校協働活動	① 児童会活動や総合的な学習の時間、または学校運営協議会等において、児童や職員が地域の方々と積極的に関わりを深め、交流や安全対策等の充実を図る。 ② ホームページや学校だより、メール配信等を活用し、教育活動の情報を積極的に発信して保護者や地域の方々の理解を得られるようにする。	① 学校運営協議会を定期的に行ったり、生活科や総合的な学習の時間、児童会活動等でコロナ禍でもできる活動に取り組んだりして、地域との連携を深めてきた。 ② 児童の活動の様子を学校便りで紹介したり、説明会をYouTubeで配信したりしながら、教育活動の情報を発信してきた。来年度はホームページの更新にも力を入れていきたい。	B
いじめへの対応	① 職員会議での児童理解やいじめ防止委員会の実施で、情報を職員が共有し、いじめの早期解決・再発防止体制作り、情報モラルに対する指導等を推進する。 ② 日頃より児童理解に努め、些細な兆候や変化を見逃さないようにし、スクールカウンセラー・SSWとの連携を強める。年2回の児童へのアンケートを実施し、児童の様子を把握できるように努める。	① 職員会議で情報共有することで児童理解に繋がった。またいじめ防止委員会では、校内の現状の確認と取り組みの周知を行っている。 ② 専任と教職員の連絡を密にし、いじめや問題行動の兆候を早めに察知し即応できるような体制づくりができた。アンケート結果からわかることを検証し児童の現状把握に努めた。	B
人材育成・組織運営(働き方)	① メンターチームで若手教員の困り感や必要感に寄り添った研修を行い指導力の向上を図るとともに、メンターのリーダーシップ育成を進める ② 若手・中堅の分掌代表と担当主幹等との協働により校務運営を行い、マネジメント力を育成する ③ テストのデジタル採点を導入し、採点・集計時間の短縮を図る	① 若手教員の困り感や必要感をもとに、メンターチームで研修の計画・運営を行うことで指導力の向上を図るとともにリーダーシップの育成に努めた。 ② 分掌代表と担当主幹等との協働を通じて双方の、マネジメント力育成が図られた。 ③ 高学年において、テストのデジタル採点を導入し、活用してきたことにより、採点・集計時間の短縮につながってきた。	B
特別支援教育	① 支援を必要とする児童に寄り添い、きめ細かな支援ができるように、校内支援体制を整える。 ② 校内研修を充実させ、学習環境の整備・授業のユニバーサルデザインを図ることに努める。 ③ 特別支援教室を開設し、学習支援や不登校児童の対応にあたる。 ④ スクールカウンセラーや療育センター、SSWなどと連携し、児童理解、特別支援教育の充実を図る。	① 校内支援体制が人手不足の関係もあり、うまく体制が組めなかった。 ② 校内研修の実施が難しく、各学年、教職委員に委ねられていた部分があったように感じた。 ③ 校内事情で特別支援教室の開設が難しく、十分な支援はできなかった。個人面談等で保護者からの実施要望もあった。 ④ SCと児童の支援の方法について密に情報共有し、児童理解を深めた。SSWには、事案について支援の方法や他機関との連携に関して相談することが多く、支援に繋げることができた。	B
情報教育	① 一人一台タブレットの特性を生かした個別最適化学習を目指すとともに、児童がICTを効果的に活用する資質・能力を育成するための具体的な場面を想定したカリキュラムや体系表を作成する。 ② 情報社会で適切な行動・判断を行うため、情報リテラシーのもととなる考え方と態度を育む。	① 各学年の取組を情報交換しながら、発達段階を考慮し、カリキュラムや体系表の作成につなげてきた。個別最適化学習を目指すために今後もさらに充実を図っていく必要がある。 ② 職員研修等を通して、情報リテラシーに関わる考え方について学び、必要に応じて児童に指導をしてきた。	B
ブロック内評価後の気付き	・小中一貫教育推進ブロック授業研では、3年ぶりに多くの授業交流(小学校で中学教員が授業、児童が中学を見学・部体験、小学校教員の中学校授業見学)ができ、小学校児童の不安を軽減し、中学への安心できるつながりを設定できた。 ・小中合同研究では9年間で身に付けてほしい資質・能力やバランスのよいICT活用の工夫など情報交換ができ、とても有意義であった。課題として、小学校同士の交流や、小6のみでなく9学年での交流も検討したい。また、子ども会議を中心にブロックの全校児童、生徒で課題を意識できる主体的な取組も検討したい。		
学校関係者評価	・学校での活動や児童の様子をもっと積極的に発信して欲しい。児童から保護者に「今日こんなことがあった」と伝えることも大切である。学校で指導したことが共有されることで、家庭での連携した指導にも繋がる。 ・地域と学校が何で、どのように連携するのか、連携して何をするのか、を具体的に意見交換していきたい。 ・生活科や総合的な学習で、地域と積極的にかかわっていることが分かった。自分たちの町を好きになり、地域防犯にもつながる大切な活動だと思ふ。		
中期取組目標振り返り	生活科や総合的な学習の時間を中心に、積極的にまちの方々に関わり、主体的に学ぶ子どもたちの姿が見られた。また、ペア活動の導入により、子ども同士の育ちあいを実感することができた。 学校ホームページや学校だよりなどの内容を充実させ、学校での活動や取り組みを積極的に伝えようと、保護者や地域の方との連携をより工夫して深めていきたい。 児童支援専任と担任を中心に外部機関とも丁寧な連携することで課題の共有・解決を行うことができたが、校内事情により特別支援教室の開設が難しく、個に応じた十分な支援には至らなかった。		